

世界の小学校教育

Elementary Education
around the World

今月の国・地域 : 香港

学校の種類は多いが いずれも目指すはトライリンガル

This month
Hong Kong



英語と広東語が公用語とされている国際都市香港。ここには、世界各国から母語の違う人たちが集まっている。子どもたちは一体どのような学校に通い、どのような教育を受けるのだろうか。小学校から始まる、香港の語学教育を見てみよう。

文・写真◎リン美雪 Miyuki LYNN
コーディネーション◎ホリコミュニケーション

香 港の小学校は大きく分けて3種類ある。学費が無料の公立校(官立校と津貼校があり、教員が公務員かどうかで区別される)、植民地時代香港政府が設立した、英語で授業が行われる English School Foundation(政府が授業料の一部を助成する直資校。以下ESF)、そして英語やその他の言語を導入している私立のインターナショナルスクール(政府からの助成を受けない。以下インター校)である。

小学校教育は6年間。香港各地にある601校の公立小学校では、授業は広東語で行われる。小学5年生と6年生で受ける3度の試験により進学先の中学校がほぼ決定するため、毎日3~4時間かかる宿題をこなすのが公立校に通う小学生。返還前には219校あった英語で授業が行われる中学校(英文中学)が、「母語教育」促進のため現在では半分減った。しかし英語ができたほうが社会的に有利という理由から、子どもを英文中学に通わせたいと考える保護者が多い。英語の授業は毎日あるが、週数回は各小学校に1人いるNET(Native Speaking English Teachers)と呼ばれるネイティブの先

生に教わる。また中国語(普通語)の授業も低学年は週に2回ある。読み書きは広東語と同じなので、主に発音を習う。ここで子どもたちに求められているのは、広東語と中国語と英語が話せるトライリンガルである。

ESFは1967年に香港政府が近代的で自由な教育を英語で行う目的で設立



インター校と公立校が隣接することも

した。現在は20校あり、そのうち9校は小学校である。インター校に比べて学費が安いので競争率が高いが、両親のどちらかが香港の永住権を取得していると優先的に入学できる。授業はすべて英語で行われ、カリキュラムもイギリス式。しかし中国語の授業は小学校1年生から6年生まで毎日ある。ピ

ンインや漢字の学習だけでなく、香港に住んでいるからこそ体験できる旧正月や中秋節などを通じて、中国や香港の文化についても学ぶ。また中国文化教育にも力を入れている。

インター校には2通りある。英語を母語とするオーストラリアンインターやカナディアンインターと、英語で授業を行うが、それ以外の言語も習うフレンチインターやジャパニーズインターなどである。後者は中国語の授業に加えて、もう一つの言語の授業も何時間が割り当てられる。ここでも子どもたちに求められているのは、英語と中国語に加えてもう1言語を話すトライリンガルである。

また西洋と東洋が混在する香港という土地柄、国際結婚の保護者が多い。母の国、父の国、そして住んでいる香港の文化の3つの文化の中で育つ子どもたちが数多く存在する。例えばイギリス人の父と日本人の母を持つ香港生まれの子どもはイギリスと日本と香港の文化を学びながらその言語も学ぶのだ。

どの小学校に通うことになっても、香港の小学生が目指すのはトライリンガルなのである。